

令和6年度 学校自己評価表				(最終)		学校名 三原市立中之町小学校		校番(4)						
a 学校教育目標		学びあい、思いあい、高めあいのできる児童の育成「三愛」		b 経営理念 ミッション・ビジョン		【ミッション】(自校の使命) 友達と学びあい、思いあい、高まりあう児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 行きたい 行かせたい 行かせてよかった学校								
評価計画					自己評価					改善方策		学校関係者評価		
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	9 月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価			m コメント
					h 達成値	h 達成値					イ	ロ	ハ	
確かな学力の向上	確かな学力を身に付けた児童の育成	◎主体的・対話的で深い学びの実現により確かな学力を育成する。 ○UDLの視点を取り入れた授業改善 ・学習者の視点で学びの障害を取り除く ・多様な選択肢と自己決定の場の提供 ・自分にあった学び方で学習し、自ら学ぶ「学びのエキスパート」の育成	○算数科を中心とした「見方・考え方」を働かせ、「問い」を解決する授業づくり ・つきたい力とゴールの明確化 ・追究したくなる問題提示、児童主体の課題設定 ・「分かる」「出来る」確かな学力の定着 ・数学的な見方、考え方を育てる問題解決学習 ・「問い」がつながる単元構成（・繰り返し学習の徹底） ○UDLの視点を取り入れた授業改善 ・学習者の視点で学びの障害を取り除く ・多様な選択肢と自己決定の場の提供 ・自分にあった学び方で学習し、自ら学ぶ「学びのエキスパート」の育成	①単元末テストの「知識・技能」において、85%以上の児童の割合 ②単元末テストの「思考・判断・表現」において、70%以上の児童の割合 ③「UDLの視点を取り入れた授業改善を意識することができた」と回答している教師の割合 「自ら進んで学習に取り組むことができている」と回答している児童の割合	①80% ②80% ③どちらも90%	①57.0% ②67.1% ③教師87.5% 児童87.7%	①51.3% ②68.2% ③教師84.6% 児童85.3%	①64.1% ②85.2% ③教師93.9% 児童94.8%	①目標を達成できなかった。(64.1%) 「知識・技能」領域での全校平均点は82点であるのに対して、達成できている児童の割合がなかなか向上しない。低学年の傾向では、40～80%の中間層が多く、基礎学力の定着を徹底できていないことが考えられる。中学年、高学年では、低学力の児童の固定化に加え、低学年と同様に40～80%の児童が多いという傾向があった。授業改善及びチャレンジタイムの充実を図り、学力が定着していない児童への個への指導・支援も行ってきたが、結果につながりにくかった。また、各学年の結果を受けての学力向上に関する手立てや具体的な取組等の交流をする場も十分に設けることができなかった。 ②目標を達成することができなかった。(85.2%) 休業中の校内研修において児童の実態把握と目標共有をした上で授業改善や学力補充等を行ったが、数値としての改善につながっていない。土台である集団としての学習規律、学習集団づくりも大事にすることに加え、「思考・判断・表現力」を身に付けさせるための具体的な実践を交流する必要がある。学びの状態を把握する多様な評価方法については、校内で十分実施することまでに至らなかった。 ③目標を達成することができなかった。(教師93.9%、児童94.8%) 夏季休業中にも校内研修を行い、11月には講師を招聘しての指導・助言や講話を受けたことで理解は深まった一方で、教師自身の意識の向上にはつながらなかった。現段階での教師の悩みや困り感に対して校内での研修の持ち方を再考していく必要がある。 児童の意識でも、肯定的回答結果がやや低下した。単元内容の違いや既習が十分に付いていない中で意識の減少も理由として考えられる。教師の見取りとのズレは小さくなっているため、できている部分を肯定的に価値づけし、「学びのエキスパート」を目指す児童を育てていく。	①自ら進んで学習する児童を育成することを意識した授業改善に努めるとともに、学力の定着を図る手立てをより重要視していく。低学年の基礎学力の定着を徹底していくことと、中高学年の中間層の児童への手立てを講じていく必要がある。特に、授業改善において、理解力のある児童のみが引っ張る授業ではなく、中間層の児童が授業に参加し、意見を練り合うような授業改善を継続していく。そのためには、単元末テストや標準学力調査の結果の分析および、授業の具体的な改善方法を全教職員で話す場や授業づくりの具体を交流・実践していくサイクルを確立することが必要と考える。 ②「思考・判断・表現」の力を育成するために、教師自身がどのような指導や支援を行うかを学年部やブロックで交流していく。授業や個別指導で効果的だった実践や指導法について知る機会を増やす。 単元末テストでの課題分析と改善に向けての見直しをサイクル化する。 「児童主体」の授業改善を継続していく。また、結果の把握と分析、改善方法に加え、児童の学びに対してどのような評価を取り入れていくかの研修を取り入れ、より充実させていく。 ③UDLの視点を取り入れての授業改善を行っていく中で、効果的だった取組を紹介しあえる場をもち、校内で蓄積をしていく。現段階での課題や先生方のアンケート回答については、校内で共有し、改善につなげるための実践法の交流等を継続していく。 「学びのエキスパート」の育成という目的のために、UDLという視点で授業改善しているという点を校内でもっと意識付け、「実施」⇒「実態把握」⇒「振り返り」⇒「改善」というサイクルが習慣づくようにしていく。	○			・基礎学力の定着に向け、量をこなしてつづき力、力をつける子もいると思うが、定着前の理解ができていないところをどのようにするかも課題。 ・基礎学力の定着が課題と分析し、授業改善や学力中間層の底上げを改善するとしているが、低学年での基礎学力の定着、チャレンジタイムの充実や工夫も含め、取組内容を示し、全教職員が1学期から取り組めるようにすることが必要と考える。 ・目標に対しての方策や達成度を掲げ、数値化することで評価の基準がわかりやすかった。今後の取組により、通過率の改善が図られることに期待をしている。
			①学級・学年・児童会としての意識を高める集団づくり ・学校行事・児童会行事を活用した目標・手立ての設定と振り返り ・がんばりを認める場の設定 ・縦割り班活動の活用 ②「気持ちの良い学校」づくり ・児童会活動とリンクさせた生活目標の設定 ・「あいさつ」と「掃除」による明るくきれいな学校づくり	①学校行事・児童会行事において、目標達成のために手立てを設定し、頑張りを認める場の設定（月1回以上） ②「あいさつ」「掃除」の振り返りで肯定的評価をした児童・教師・保護者の割合	①90% ②90%	①100% ②「挨拶」児童88.7% 教師38.9% 保護者64.3% 「掃除」児童90% 教師72%	①100% ②「挨拶」児童86.3% 教師61.1% 保護者65.5% 「掃除」児童88.0% 教師83.3%	①A ②「挨拶」児童B 教師C 保護者C 「掃除」児童B 教師B	①目標を達成することができた。 児童会が中心となり、学級・学年の集団の意識を高める取組を行うことができた。それぞれのクラスの頑張りを放送で紹介したり、表彰したりするなど、頑張りを認める場の設定をした。 ②あいさつにかかわっては目標を達成することができなかった。 教職員であいさつができている児童に対して、積極的に肯定的な評価を行っていったことにより教師の評価が高まっている。校内だけでなく、地域や家庭も巻き込んだ取り組みが必要であった。 掃除にかかわっては、肯定的に評価している児童が多い。児童の自己評価は下がっていたが、教師の評価が上がっている。3学期に入り、6年児童が掃除に取り組むようになり、教師の評価が上がったと考える。	①今後も、子供たちが主体となれるよう、児童会活動や学校行事を仕組んでいくことで、子供たちの頑張りを認めていく場を設定して、児童の自己有用感や自己肯定感を高めていく。 ②あいさつについては引き続き指導が必要である。学校全体として、挨拶のできている児童を積極的に評価していく。また、地域や保護者に対して、児童のあいさつにかかわる実態を共有し、ともに取組を進めていく。 掃除に関しては縦割り班での無言掃除を意識して取り組むようにしていく。今後も、具体的な掃除の方法を児童に伝えるとともに、真剣に取り組んでいる児童を積極的に評価していく、児童の掃除に対する意欲を高めていく。	○			・「挨拶」については、肯定的評価が上昇しており評価できる。一方で、地域で挨拶をしてもらうようになった子どももおり、来ている子供を評価し時間をかけてでも改善できるように取り組んでほしい。 ・保護者や家庭を巻き込んだ取組の具現化に期待をしている。
豊かな心の育成	潤いと落ち着きのある児童の育成	◎目標達成のため、自ら挑戦し、仲間とともに粘り強くやりぬく力を育成する ○自分の健康に関心を持ち、健康課題を自ら解決していこうとする態度を育成する	①基礎体力の向上・運動が好きな児童の育成 ・体力テストの実施による課題の分析と指導の改善 ・体育の授業の工夫 ・外遊びの推奨の奨励と朝マラソンの実施 ②計画的・意図的な食育指導・給食指導の実施	①運動やスポーツが好きな児童の割合 ②感謝して残さず食べようと する児童の割合	①95% ②90%	①84.9% ②91.2%	①83.7% ②88.0%	①88.1% ②97.8%	①目標を達成することができなかった。 児童アンケートや体力テスト(5年児童)の結果から、体を動かす事が好きな児童は多いが、運動に苦手意識がある児童もいることが分かった。感染症への対策意識や、厳寒期の気温から、意欲や筋力などが低下しているのではないかと分析する。一方で、1月に実施したマラソン大会では走る距離を児童が選んで決めたり、保健体育委員や児童会役員本部が全校遊びを企画して運営したりしたことで、意欲的に体を動かそうとする児童が多かった。 ②目標を達成することができなかった。 毎月19日の食育の日の全校指導や各学年の栄養教諭との連携授業、5年生の総合的な学習の時間の取組を通して、95.2%の児童が食べることへの感謝の気持ちをもつことができ、87.5%の児童が残さず食べようとしていることが分かった。給食を感謝して食べる児童の割合は多いが、残さず食べようとする児童の割合が少ないことが分かったため、今後も配膳の初めに給食を食べる量を調整する時間を設定し、自分で決めた量を食べる経験を味わえるようにする。	①年度当初から、アクティブチャイルドプログラムを体育科の領域に合わせ、計画的に準備運動に取り入れるよう確認し、楽しく運動できるようにさせる。冬季は、なわとびカードを取り入れるなどし、休憩時間も進んで楽しんで外に出て、運動ができることを仕組んでいく。 ②引き続き、食育の日や栄養教諭との連携授業を行い、感謝して食べようとする意識を高めさせていく。また、全国学校給食週間(1月)に合わせて、各学年で取り組んだ食育についてポスターで交流できるようにし、保護者にも学校での食育について連携できるようにしていく。	○			・児童が自ら目標を決めて取り組む、というアイデアは良いと思うので、体つりの目標を獲得させるためにも継続して取り組んでほしい。 ・食育指導についてよく検討をされているので、引き続きSDGsの学習などを通して、内容を膨らませていただきたい。 ・「体を動かすことが好き」「運動が好き」に向けた有効な取組、どうすれば「基礎体力の向上」に繋がるのか等、校内での検討と取組をお願いしたい。 ・苦手なこと・できないことが、何かのきっかけでできるようになったり、好きになったりすると思うので、みんなでやってみようという雰囲気づくりを
			生涯にわたり心身ともに健康で安全な生活を送るための基礎的実践力の育成	①基礎体力の向上・運動が好きな児童の育成 ・体力テストの実施による課題の分析と指導の改善 ・体育の授業の工夫 ・外遊びの推奨の奨励と朝マラソンの実施 ②計画的・意図的な食育指導・給食指導の実施	①運動やスポーツが好きな児童の割合 ②感謝して残さず食べようと する児童の割合	①95% ②90%	①84.9% ②91.2%	①83.7% ②88.0%	①88.1% ②97.8%	①B ②B	①目標を達成することができなかった。 児童アンケートや体力テスト(5年児童)の結果から、体を動かす事が好きな児童は多いが、運動に苦手意識がある児童もいることが分かった。感染症への対策意識や、厳寒期の気温から、意欲や筋力などが低下しているのではないかと分析する。一方で、1月に実施したマラソン大会では走る距離を児童が選んで決めたり、保健体育委員や児童会役員本部が全校遊びを企画して運営したりしたことで、意欲的に体を動かそうとする児童が多かった。 ②目標を達成することができなかった。 毎月19日の食育の日の全校指導や各学年の栄養教諭との連携授業、5年生の総合的な学習の時間の取組を通して、95.2%の児童が食べることへの感謝の気持ちをもつことができ、87.5%の児童が残さず食べようとしていることが分かった。給食を感謝して食べる児童の割合は多いが、残さず食べようとする児童の割合が少ないことが分かったため、今後も配膳の初めに給食を食べる量を調整する時間を設定し、自分で決めた量を食べる経験を味わえるようにする。	①年度当初から、アクティブチャイルドプログラムを体育科の領域に合わせ、計画的に準備運動に取り入れるよう確認し、楽しく運動できるようにさせる。冬季は、なわとびカードを取り入れるなどし、休憩時間も進んで楽しんで外に出て、運動ができることを仕組んでいく。 ②引き続き、食育の日や栄養教諭との連携授業を行い、感謝して食べようとする意識を高めさせていく。また、全国学校給食週間(1月)に合わせて、各学年で取り組んだ食育についてポスターで交流できるようにし、保護者にも学校での食育について連携できるようにしていく。	○	
健やかな体の育成	生涯にわたり心身ともに健康で安全な生活を送るための基礎的実践力の育成	○自分の健康に関心を持ち、健康課題を自ら解決していこうとする態度を育成する	①基礎体力の向上・運動が好きな児童の育成 ・体力テストの実施による課題の分析と指導の改善 ・体育の授業の工夫 ・外遊びの推奨の奨励と朝マラソンの実施 ②計画的・意図的な食育指導・給食指導の実施	①運動やスポーツが好きな児童の割合 ②感謝して残さず食べようと する児童の割合	①95% ②90%	①84.9% ②91.2%	①83.7% ②88.0%	①88.1% ②97.8%	①目標を達成することができなかった。 児童アンケートや体力テスト(5年児童)の結果から、体を動かす事が好きな児童は多いが、運動に苦手意識がある児童もいることが分かった。感染症への対策意識や、厳寒期の気温から、意欲や筋力などが低下しているのではないかと分析する。一方で、1月に実施したマラソン大会では走る距離を児童が選んで決めたり、保健体育委員や児童会役員本部が全校遊びを企画して運営したりしたことで、意欲的に体を動かそうとする児童が多かった。 ②目標を達成することができなかった。 毎月19日の食育の日の全校指導や各学年の栄養教諭との連携授業、5年生の総合的な学習の時間の取組を通して、95.2%の児童が食べることへの感謝の気持ちをもつことができ、87.5%の児童が残さず食べようとしていることが分かった。給食を感謝して食べる児童の割合は多いが、残さず食べようとする児童の割合が少ないことが分かったため、今後も配膳の初めに給食を食べる量を調整する時間を設定し、自分で決めた量を食べる経験を味わえるようにする。	①年度当初から、アクティブチャイルドプログラムを体育科の領域に合わせ、計画的に準備運動に取り入れるよう確認し、楽しく運動できるようにさせる。冬季は、なわとびカードを取り入れるなどし、休憩時間も進んで楽しんで外に出て、運動ができることを仕組んでいく。 ②引き続き、食育の日や栄養教諭との連携授業を行い、感謝して食べようとする意識を高めさせていく。また、全国学校給食週間(1月)に合わせて、各学年で取り組んだ食育についてポスターで交流できるようにし、保護者にも学校での食育について連携できるようにしていく。	○			・児童が自ら目標を決めて取り組む、というアイデアは良いと思うので、体つりの目標を獲得させるためにも継続して取り組んでほしい。 ・食育指導についてよく検討をされているので、引き続きSDGsの学習などを通して、内容を膨らませていただきたい。 ・「体を動かすことが好き」「運動が好き」に向けた有効な取組、どうすれば「基礎体力の向上」に繋がるのか等、校内での検討と取組をお願いしたい。 ・苦手なこと・できないことが、何かのきっかけでできるようになったり、好きになったりすると思うので、みんなでやってみようという雰囲気づくりを
			生涯にわたり心身ともに健康で安全な生活を送るための基礎的実践力の育成	①基礎体力の向上・運動が好きな児童の育成 ・体力テストの実施による課題の分析と指導の改善 ・体育の授業の工夫 ・外遊びの推奨の奨励と朝マラソンの実施 ②計画的・意図的な食育指導・給食指導の実施	①運動やスポーツが好きな児童の割合 ②感謝して残さず食べようと する児童の割合	①95% ②90%	①84.9% ②91.2%	①83.7% ②88.0%	①88.1% ②97.8%	①B ②B	①目標を達成することができなかった。 児童アンケートや体力テスト(5年児童)の結果から、体を動かす事が好きな児童は多いが、運動に苦手意識がある児童もいることが分かった。感染症への対策意識や、厳寒期の気温から、意欲や筋力などが低下しているのではないかと分析する。一方で、1月に実施したマラソン大会では走る距離を児童が選んで決めたり、保健体育委員や児童会役員本部が全校遊びを企画して運営したりしたことで、意欲的に体を動かそうとする児童が多かった。 ②目標を達成することができなかった。 毎月19日の食育の日の全校指導や各学年の栄養教諭との連携授業、5年生の総合的な学習の時間の取組を通して、95.2%の児童が食べることへの感謝の気持ちをもつことができ、87.5%の児童が残さず食べようとしていることが分かった。給食を感謝して食べる児童の割合は多いが、残さず食べようとする児童の割合が少ないことが分かったため、今後も配膳の初めに給食を食べる量を調整する時間を設定し、自分で決めた量を食べる経験を味わえるようにする。	①年度当初から、アクティブチャイルドプログラムを体育科の領域に合わせ、計画的に準備運動に取り入れるよう確認し、楽しく運動できるようにさせる。冬季は、なわとびカードを取り入れるなどし、休憩時間も進んで楽しんで外に出て、運動ができることを仕組んでいく。 ②引き続き、食育の日や栄養教諭との連携授業を行い、感謝して食べようとする意識を高めさせていく。また、全国学校給食週間(1月)に合わせて、各学年で取り組んだ食育についてポスターで交流できるようにし、保護者にも学校での食育について連携できるようにしていく。	○	
信賴される学校	保護者・地域とともに歩む学校の推進	○不祥事防止の徹底 ○地域とともにある学校の創造 ○教職員が健康でやりがいをもって勤務できる環境づくり	①自己との関わりで意識向上を図る研修の実施 ②保護者、地域、関係機関との連携 ・コミュニティスクールの推進 ③積極的な働き方改革への意識の向上 ・定時退校日の実施(毎週水曜日)	①不祥事防止研修の実施（月1回以上） ②地域の人材を活用した教育活動の実施(全学年、年1回以上) ③時間外勤務45時間以下の月が6ヶ月以上の教職員の割合	①100% ②100% ③100%	①100% ②100% ③96%	①100% ②100% ③96%	①100% ②100% ③96%	①目標を達成できた。(100%) 不祥事防止研修の担当を学年で分担し行うことで、不祥事に対する意識向上につながっている。研修にロールプレイや意見交流を取り入れ自分事として捉えられるようにしている。 ②目標を達成できた。(100%) 全学年、学校林に関わり、フォレストサポートを活用した取組ができた。また、体育参観日のやすさに向けて、やすさ振興協議会の方の指導を受けた。また、4年生以上、水泳学習を地域の方に指導していただいたり、1年生は、老人会の方をお招きし、昔の遊びを教えていただいたり、2年生は、町探検で地域に出向き、地域の事業所などの人にインタビューをしたり、6年生は、東高校の生徒に「情報モラル」についての授業をしてもらったりした。 ③時間外の在校等時間が45時間以下の月が半分に満たない教職員は1名のみであった。(4～1月) 昨年のこの時期に比べ、時間外勤務が月45時間以上の職員が大変少なかった(昨年は88%)。昨年度は、こちらから声かけをするが多かったが、今年度は、学年部で仕事を計画的に行い、そって帰る姿をよく目にした。 成果の表れた取組⇒放課後の時間の確保、成績等に係るスケジュールの提示、成績等に係る作業日の確保、週1回の学年会の実施等。	①不祥事防止委員会など各種委員会においてヒヤリハット事案を出し合い、未然防止に努める。 ②コミュニティスクール実施に向け、体制を整えていく。組織づくりや課題や目標の共有をし、効果的に実施ができるように、来年度以降どのようなことが具体的にできそうか話し合っていく。地域の教材化も含め、各学年の年間指導計画に位置付けていく。 ③職員一人一人の意識改革を行いながら、業務改善をさらに進める。成績処理について、見直しをもち、計画的にできるように、3学期末までのスケジュールを細かく提示しているので、適宜声かけをしていく。会議などの持ち方を検討。	○			・「働き方改革」で子供たち一人ひとりへの指導が薄くなるといった本末転倒なことにならないよう、来年度からのCS実施に向け地域人材の活用と連携、学校現場の実態のすり合わせが急務ではないだろうか。 ・CS実施に向け、学校を中心として地域がつながり、地域が学校のより理解者となるような取組を進めていただきたい。 ・地域と保護者に参加してもらってのCS運営となるよう、学校・PTAからの情報発信が必要である。

本年度の重点目標については◎印で示す。

【j:自己評価 評価】
A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100
C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【l:学校関係者評価 評価】
イ:自己評価は適正である。 ロ:自己評価は適正でない。
ハ:分からない。